

精神科医の思うこと③⑤

『児童自立支援施設』

松村 奈奈子

児童自立支援施設の嘱託医をしています。毎年、秋には文化祭があって来賓として呼んでいたのですが、都合が合えば参加させていただいています。ここ何年か参加できていなかったのですが、今年は久しぶりに参加しました。毎回の定番は、児童たちの作文の朗読発表と太鼓。太鼓の発表は京都の施設独特の企画なのですが、一生懸命に和太鼓を叩く子供たちを見ると、毎回じーんときて、じわっと涙が出てきます。今年もウルウルしながら見ていて、いろいろ思う事があったので、今回のテーマは「児童自立支援施設」

だいたい「児童自立支援施設」ってなんだ？ですよね。私も精神科医になって、しばらくは知りませんでした。その後、たまたま思春期を専門とする先輩が、『「児童自立支援施設」ってのがあって、ヤンチャな子供たちがいて、精神科嘱託医としてお話を聞く仕事があるんだよー』のなんて話しているのを聞いて、「おー、私もいつかヤンチャな子の話を聞いてみたいなー」なんて思ったのですが、その後は病院勤務が中心で忘れていました。

たまたま異動で京都郊外の総合病院に勤務していた時、「児童自立支援施設」の子どもが診察に来ました。施設に精神科の嘱託医はいるのですが、施設内ではお薬が出せないの、施設外の病院に通院するようです。聞くと、施設は病院のすぐ近所にあると話します。「おー、昔に聞いた施設は近所だったのか」と思い出し、しばらくして「患者さんの生活を知りたいので見学したい」と希望して施設におじゃまさせていただきました。

見学させてもらった京都の施設は夫婦小舎制で、いくつかの寮があって、ひとつの寮には夫婦とその家族が生活するスペースと、ドア一枚を隔てて10人前後の入所の子ども達が生活するスペースがあります。「おー、こんな感じで関わっていくのか！」「健康的な家族と共に暮らす事で、子ども達はいろんな事を学ぶシステムなのか」「スタッフはエネルギーのいる大変な仕事やなー」などなど、とにかく驚きの連続でした。「児童自立支援施設」なかなかスゴイです。私もうまく説明できないので、「全国児童自立支援施設協議会」HP(<https://zenjikyo.org/>)で詳

しく説明されているので、興味がある方は覗いてみてください。明治には「感化院」として始まり、昭和初期には「教護院」となり、平成に「児童自立支援施設」と名前を変えた歴史も書いてあります。

その後、総合病院を退職したあとに人事担当の先生に「空きがあったら児童自立支援施設の嘱託医をしたい」と希望を伝えていたら、願いかなって十数年前から嘱託医の仕事をさせてもらっています。月に2回しか診察に行かないので治療と言うよりは、ほんと「お話を聞く」感じなんです。逆に私が子ども達や寮のスタッフさんからたくさん学ばせてもらっています。児童相談所の嘱託医でもあるので、児童相談所で診察した子どもを施設をで診る事もあるのですが、みるみる変化する姿に驚かされます。

月に2回の診察ですが、子ども達は全員、入所直後に1度必ず診察をすることになっていて、その後は本人の希望やスタッフの判断で診察に来る感じにしています。そして私の希望で、卒業前にも全員診察させてもらっています。それは、みんなの成長を確認させてもらうためです。初回の診察では入所の経緯を心理スタッフなどから聞かせて頂くのですが、それはそれはキビシイ人生を体験した子ども達が多いです。「うーん、私でもその環境で生活したら、人を傷つけたり、自分を傷つける行動をしちゃうよな」と思ってしまいます。もちろん、子ども達にも直接入所の経緯を聞いてみるのですが、淡々と被虐待の経験やネグレクトの経験を語る姿に、「大変やったなあ」としか言えない私です。人や自分の心や体を傷つけるのは、心や体を傷つけられたからです。大事にされたと感じている子ども達は、人を傷つける事はしないと私は思っています。

施設内は規則正しい生活で、スマホもゲームありません。現代の10代の子ども達にはなかなかハードな生活です。子ども達は最初は「ブーブー」文句を言うのですが、次第に「野球が楽しい」と自主的に素振りをして出来た手の掌のマメを見せてくれたり、レクリエーションで行った釣りでアジがとれたと、楽しそうに話します。ここは鍵のない寮生活なので、子ども達の心をとらえて、関わっていくスタッフはすごいなあいつも思っています。そして、私は卒業前の子どもの診察では必ず「ここに来てよかった？」と聞きます。ほぼ全員が「うーん、いろいろあったけど、ここに来てよかった」と答えます。もちろん私も「ほんま、成長したなー」と全員に返します。初回の診察で「夢なんかない。早く家に帰りたいわ」と言ってた子どもが「とりあえず、高校に行く」「ここで野球やって楽しかったし、高校は野球部に入る」なーんて前向きな言葉を言えるようになっていく変化に、いつも感動します。

嘱託医になって初めの頃は、寮での子ども達の生活が気になって、時々「お昼ごはん」の時間に寮まで出かけて行って、子ども達と一緒にご飯を食べたりしていました。寮を担当する夫婦が学校の事などを聞いたり、食べ方の作法を教えたり、本当の家族の食卓にお邪魔した感じです。診察の後、夕食後のリラックス時間におじゃまする事もあるんですが、リビングで子ども達がテレビを見たり、寮を担当する夫婦の幼い子ども達と一緒に過ごしている姿を見ると、あっ

たかい大家族のような雰囲気、これがこの施設のスゴイところだなあとします。

ただ、京都はまだ夫婦でひとつの寮をもつ夫婦制ですが、他県のいくつかの施設はスタッフが夫婦ではなく交代制の施設もあります。

ずいぶん前ですが学会で「自立支援施設」を研究している大学が全国の入所中の子ども達にアンケートを取ったら「夫婦制」の方が「交代制」より子ども達の満足度が高いという結果を発表されていました。そりゃそうだな、と思います。ただ、3組に1組が離婚する昨今、夫婦でお互いを信じて話し合って同じ方針で、関りの難しい子ども達に向かっていくのは、スタッフ自身の健康的な精神とこの仕事に対する「思い」がないと続かないと思います。いやー、恥ずかしながら私は旦那と方針が合わずきつと大ゲンカになってしまいそうで、できません。心理スタッフともよく話すのですが、マジで尊敬しています。

たった十数年の嘱託医の経過ですが、ここ十年で入所してくる子ども達の理由が大きく変化している事に驚いています。よく知られたことですが、いわゆる非行少年はバブル期(1983年頃)から減少し、現在はバブル期のたった 10%程に急激に減少しています。

十数年前は、「バイクを盗んで乗り回して警察官ともめちゃった」「入れ墨いれちゃった」みたいなヤンチャ系が主流でしたが、いろんな意味で入所する子ども達の理由が多様化したな・・・と感じます。性にまつわるケースが増えた様にも思います。

子ども達が熱意ある夫婦やスタッフの中で大切に思われる事で、大きく変化をするのを目の当たりにすると、子どもの成育には関わる大人の影響がほんと大きいんだと感じます。夢も持てず、自暴自棄だった子ども達が、難しい太鼓の曲を暗記して、みんなで一丸となって和太鼓を一生懸命にたたっている姿をみると、入所してから成長がひしひしと伝わり、いつもウルウルしてしまいます。自立支援施設でお仕事ができよかったな、と思っています。